

独 活

ARALIAE CORDATAE RHIZOMA

(基原)¹⁾

本品はウド *Aralia cordata* Thunberg 又はその他近縁植物 (Ataliaceae) の通例根茎である。

(類似生薬)⁶⁾

十数種類

独活は中国でも商品的に複雑で、川独活、香独活、牛尾独活、九眼独活などがあり、このうち川独活が生産量が多く、品質も優良で、全国的に消費されている。他のものは、生産地で消費されている。

川独活 *Angelica pubescens*
セリ科シシウド属シシウド及び近縁植物

香独活 *Angelica pubescens*
セリ科シシウド属シシウドそのもの

牛尾独活 セリ科のハナウド属ハナウド

九眼独活 ウコギ科タラノキ属ウド

日本の独活

(来歴)⁶⁾

独活は神農本草経の上品に記載されている重要な生薬である。

そして、独活一名羌活、一名羌青、一名羌使者と書いてあって、特に独活と羌活を分けていない。

この二つを分けて本草書に記載したのは、唐代になってからである。陶弘景の本草経集注(500年頃)に区別され、唐時代になって蘇敬の『新修本草』で「風の治療には独活、水を兼ねていれば羌活を用いよ」と書き加えられている。

我国にも伝えられ、すでに延喜式(927年)の薬物中に独活の名が見られ、薬用とされていた。しかし、中国産が入手困難のためか、中国で用いてる独活や羌活とは違った植物を薬用にしていた。薬用独活の中でも九眼独活、すなわちウコギ科の根を独活として採用したかという点、他に比べ臭いや味が薄いので、我国の人々の口に合ったためと考えられる。

(性状)¹⁾

本品は湾曲した不整円柱状~塊状を呈する根茎及びこれに突く奥の短い根からなり、長さ4~12cm、根茎の径2.5~7cmで、しばしば縦割りまたは輪切りにされている。

本品は特異なおいがあり、味は初めなく、後やや苦い。

本品の根茎の横切片を鏡検するとき、コルク層にはコルク石細胞があり、皮部には樹脂道及び篩部繊維群がある、またシュウ酸カルシウムの集晶を含む柔細胞が認められる。

(産地)^{7, 13)}

現在日本の市場の独活は7割から8割方、和独活であり、ほとんど内地産ウド用いられている。産地は富山などから出荷されている。

また、韓国からも輸入されるようになってきた。

東医研で使用している独活は、和独活で新潟産のものを使用している。

(品質)¹

乾燥減量	12. 0%以下(6時間)
灰分	9. 0%以下
酸不溶性灰分	2. 0%以下
選品	充実して香りの高いものが良品。

(成分)^{7, 16}

- 1.ent-pimara-8(14),-dien-19-oic acid } 和独活
- 2.ent-kaur-16-ene-19-oic acid
- Angelica pubescens(毛当帰)は以下の成分を含んでいる。
- 3.angelol
- 4.osthol } 唐独活
- 5.columbianadin

和独活と唐独活の薬効の差については、明らかではないが、ウドからジテルペン系化合物のエントーピマラン酸、エントーカウレン酸が単離報告されており、シシウド及び唐独活からはクマリン系化合物であるオストールなどが単離報告されており、全く同一の薬効を示すとは思われない。 実際以下の実験より薬理作用の違いが考えられる。

(現代薬理)^{5, 6, 7}

- ウドの根よりマウスに用いた酢酸ライジング法による鎮痛活性体として 1,2 が同定された。また、1,2 はマウスに対して、平常体温下降作用、ペントバルビタール睡眠延長作用、メタンフェタミン誘発自発運動亢進抑制を示し、鎮痛作用を有すると認められた。
- 1は *Staphylococcus aureus*, *Bacillus subtilis* に対する抗菌活性が認められた。
- 毛当帰の根よりマウス酢酸ライジング法による鎮痛作用およびラットカラゲニン足浮腫法による抗炎症作用成分として 4 が同定された。しかし、4 は 1 および 2 と異なり、平常体温効果作用、ペントバルビタール睡眠延長作用は示さなかった。
- ラット胸部大動脈標本に対して、4 はカルシウムチャンネルをブロックし、また血管平滑筋のサイクリック GMP レベルを挙げることにより弛緩作用を示すとの結果を得た
- はウサギ血小板に対し、トロンボキサン生成を抑制し、phosphoinositide を分解することにより、血小板凝集や放出反応の抑制を示した。

○抗潰瘍作用: ラットのストレス潰瘍モデルにおいて抗潰瘍作用を示し、その機序は胃液分泌抑制作用による。

○鎮痛作用: 水煎液は、マウスに対し顕著な鎮痛作用が認められた。

マウス 9 匹を一群として、鎮痛試験器の温度を 50 度 ± 0.5 に調整し、正常痛感を測定する。後ろ足を嘗める動作をもって痛覚の指標とし、秒数で記載した。この際、30 秒以内に反応を示さないマウスは除外した。

独活水エキスの鎮痛作用

マウス	1	2	3	4	5	6	7	8	9
正常痛感	12.0	10.7	10.1	13.4	15.3	10.0	16.1	12.9	22.2
独活投与後	70.5	23.4	36.4	36.4	55.0	27.0	126.7	307.5	72.2

20%独活煎液 0.1ml/10g を ip 投与、単位は秒

ちなみに、2%アンピリン 0.1ml/10g を ip 投与すると、正常痛感反応出現時間は平均 8.16 秒であり、投与後のそれは平均 15.4 秒であった。

○鎮静・催眠作用:ラット及びマウスに、独活流エキス又は煎液を腹腔内投与すると、早期に鎮静が、ついで睡眠作用を示した。・・・1.2

マウス 9 匹(体重 11~26g)に 20%独活煎液 0.1m/10g を ip 投与すると、9 分後に鎮静作用が現れ、30 分後に全部の動物が睡眠に入り、その作用は 5 時間以上持続した。

(独活寄生湯 0.1ml/10g ip 投与でも同様の作用が認められた。)

○血管収縮作用:ガマ後肢血管灌流標本に煎剤を注入すると、1 分間に強い血管収縮が認められた。

常法により作製したガマ後肢血管灌流標本に 20%独活煎液剤 0.2m を注入すると 1 分後、顕著な血管収縮が認められ、10 分後には灌流液の流出が停止した。作用は用量依存性で 1ml の注入で最も強い作用が認められた。

○(古典的薬能)⁶

薬味:辛、苦

薬性:温

帰経:少陰腎経

『神農本草経』

1.風寒の撃つ処

風気と寒気が体内のある所で撃ち合うために発熱したり痛む病気

2.金瘡の痛みを止める

金属製の刃物による傷をなおし、痛みを止める

3.奔豚

下腹から気がのどにつきあげて、今にも死にそうにしているかと思うと、またけろっとよくなる病気

4.癰瘻

急に卒倒して癰癤をおこす病

5.女子の疝瘕 疝瘕

女子に多い病や、それて下腹に冷えの気が集まり、そのために、血が滞って痛みとしこりがある、疝や、腹中の移動性のかたまりの瘕の病を治す

『金匱要略』 中風、手足拘急、百節疼痛に千金三黄湯。

『千金方』 中風口禁に独活を酒で煎じて服す。

『陳延之・小品方』 中風言語不能に、独活、酒、大豆を煎じる。

『外台秘要』 歴節風痛に独活、羌活、松節を酒煎す。

○適用¹⁶

風寒を散じ、風湿をとり、痛みを止めるといわれる。

○臨床応用^{9・16・19}

頭痛、めまい、皮膚疾患、関節痛、リウマチなどに応用する

後世方では、腰痛や神経痛、関節など、体の痛みに対する処方によく使われるが、独活は苦平の血剂であるので人間工学的に考えれば、左上半身、右下半身に働く薬物である。つまり、肩や手なら左、足なら右に効く、ということ資料もある。

1) 解表作用

感染症や皮膚疾患、頭痛に用いる。湿疹や皮膚化膿症などに防風、荊芥などと配合する(荊防敗毒散)。慢性的な頭痛には蔓荊子、川芎などと配合する(清上蠲痛湯)

2) 止痛作用

風湿による腰痛や関節痛、神経痛に用いる。慢性的な腰痛や神経痛には四物湯などを配合して用いる(独活寄生湯)。寝違いなどによる頸の突発的な疼痛には葛根、芍薬などを配合する(独活葛根湯)。

3) 通経絡作用

麻痺や痙攣に用いる。ひきつけやヒステリー、顔面神経麻痺などに沈香、天麻などと配合する(沈香天麻湯)

○症状の注意⁶⁾

陰虚で熱症状があるときは、使用に注意する(このとき、生地黄、牛膝、地骨皮を加えるとよい。)

羌 活

日本生薬名	基原植物名(中国名)	中国生薬名
(和)独活	ウコギ科ウドの根茎	土当帰
和羌活	ウコギ科ウドの根	土当帰
唐独活	セリ科シシウド(毛当帰)の根	独活
(唐)羌活	セリ科キョウカツ(羌活)の根茎	羌活

『日華諸華本草』には、「独活は羌活の母である。」とあり、これが後に日本で同一植物の母根を独活とし、幼い根を羌活とするようになった要因である。

また、本経では独活を別名羌活としているので、特に羌活についての論述はない。その後、唐代になって分けられてから、羌活に対する研究が進んだきた。

『新修本草』 風の治療には独活、水を兼ねれば羌活を用いる。

『薬性論』 羌活は芳香の気が強く、上を治し、独活は味厚で腰膝足脛の病気を治す。

その他、独活と違っている薬能は、金の張元素の温胆作用である。しかし、これは張元素だけの考えなので、検討が必要である。

『医学啓源』 羌活の味辛、気温は胆を補う作用がある。

○独活と羌活の薬能の比較⁶⁾

	独 活	羌 活
気味	辛、苦、温、	辛、苦、温
帰経	少陰腎経	太陽膀胱経、太陰肺経、厥陰肝経 ¹
作用の強弱	*より緩和	独活より強い
作用する部位	主に下半身の裏位	主に上半身の表位
昇降作用	浮昇および沈降作用 ²	浮昇沈降作用
発散作用	裏に在る伏風の発散作用が強い ³	表邪の発散作用が強く、肌表にある遊風の発散に適している ³
祛風湿作用	風湿による疼痛に用いる ⁴ 特に下半身の関節や腰部、臀部、膝のだるい痛みなどによい	風湿による関節、筋肉の疾患に効果。特に上半身の筋肉痛、正中部の筋肉の冷感と強ばりのあるものによい
気血中の邪	血中の邪を解す ⁵	気中の邪を解す ⁶
引経作用	少陰経の引経薬 少陰頭痛や風湿による下半身の痺痛に応用 ⁷ 心経の引経薬として赤眼痛に応用	太陽経の引経薬 発散作用が強いので、風湿による上半身の痺痛に用いる ⁸
使用上の注意	陰虚で熱症状のある時は使用注意 ⁹	用量が多いと嘔吐を生じやすい 風薬は燥耗する故、気血の虚のものには注意して用いる ¹⁰

注1) 膀胱経、腎経は、表裏の関係にあるので、独活、羌活はお互いに両方の経絡に入るとい説(本草用法、和語本草、本草秘録など)、また、羌活は少陰腎経に入るので、関節を通利し、痛みを止めるとする説(中医学問答、中薬配伍運用)もある。

清の陳修園は、羌活は肝に灰って風を平らげ、脾に灰って湿をとり、心に入って血脈の流行を主宰する。そのために月経後に置け於け瘀血と風湿が原因して起こってくる女子の疝瘕に本経では羌活を用いていると述べている。したがって、羌活は脾経、心経に入ることになる。

注2) 張石頑いう。昇中に降あり。

注3) 羌活は遊風(浮遊している風邪のこと)を治し、独活は伏風邪を(潜伏している風邪のこと)を治す(李士材)

注4) 「療風は独活を用いるべし。水を兼ねれば羌活を用いるべし。」(唐・蘇恭)という説があるが、これにこだわることはない。両方とも風湿を逐うと和語本草でも述べている。

注5) 独活は気香、濁、血分の邪を行す。(本草用法)

注6) 羌活は気雄、清、気分の邪を行す。(本草用法)

注7) 独活は、その香氣透心を取る(本草用法)

注8) 風湿による着痺のとき、羌活と蒼朮を組み合わせて効果があるのは、蒼朮は羌活の引を得て、太陽の表に行き、羌活は蒼朮の助けをうけて祛湿の力を増すためである。(薬対論)

注9) このとき、生地黄、牛膝、地骨皮を加えるとよい。(中医学問答)

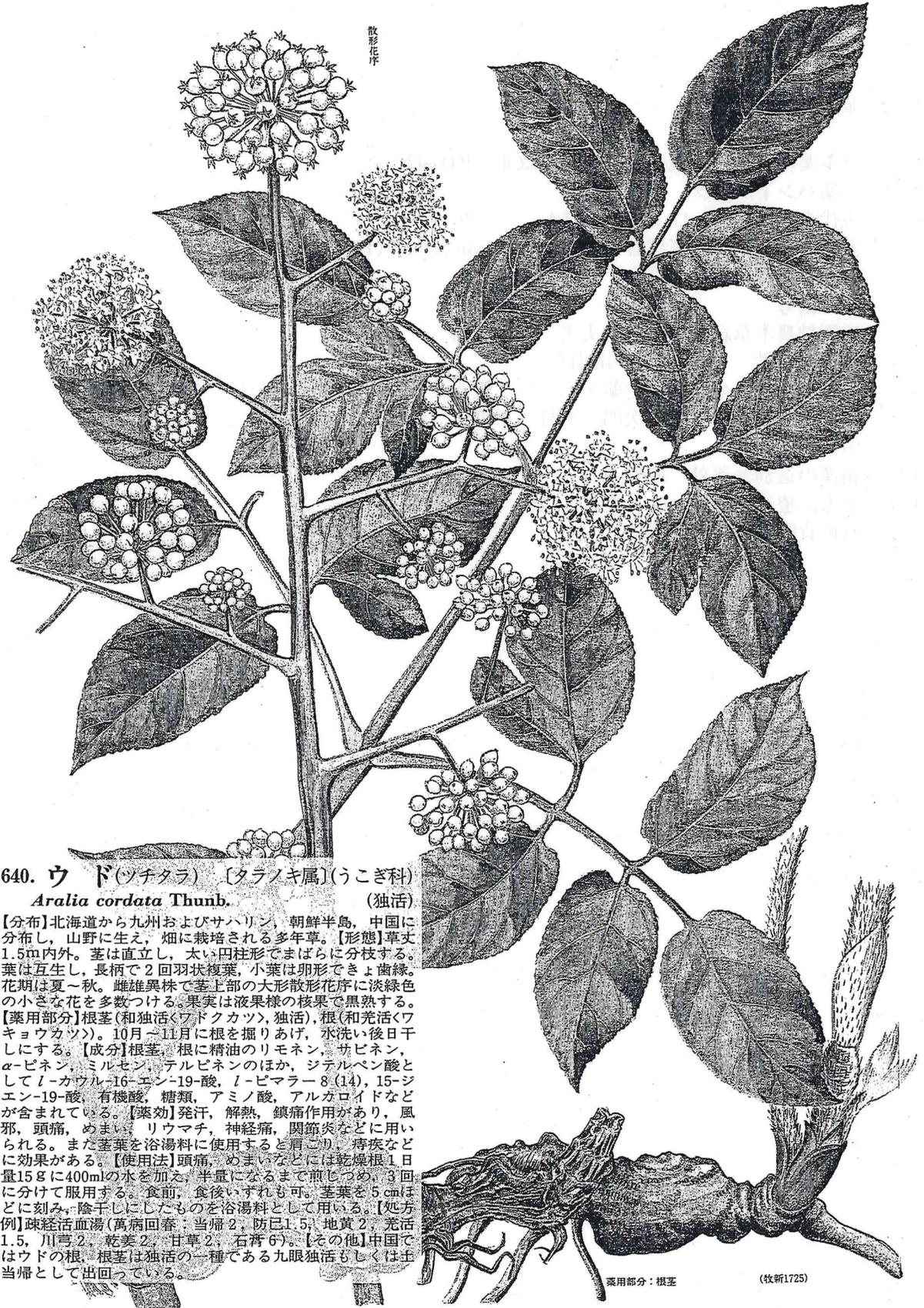
注10) 羌活は項背不舒し、苔白*ふのものによい、苔白、津少なきもの、羌活を去り生葛根を用いて解肌生津すべし(中医臨床常用対薬配伍)

表 独活・羌活を配合する漢方処方例

処方名	(出典)	独活の量	羌活の量	薬味数	処方名	(出典)	独活の量	羌活の量	薬味数
沈香天麻湯	(衛生宝鑑)	3.0	4.0	13	枳実大黄湯	(衛生宝鑑)	2.0		4
麗沢通気湯	(蘭室秘蔵)	3.0	3.0	14	芎藭香蘇散	(濟生方)	2.0		10
清上蠲痛湯	(寿世保元)	2.5	2.5	14	川芎茶調散	(和剂局方)	2.0		9
荊防敗毒散	(万病回春)	2.0	2.0	14	三和散	(和剂局方)	2.0		12
腎疸湯	(蘭室秘蔵)	2.0	2.0	16	柴胡勝濕湯	(蘭室秘蔵)	2.0		13
二朮湯	(万病回春)	1.5	1.5	12	分心気飲	(和剂局方)	2.0		15
黄連消毒飲	(寿世保元)	1.5	1.5	19	驅風解毒散	(濟生方)	1.5		6
舒筋立安湯	(万病回春)	1.2	1.2	25	疎経活血湯	(万病回春)	1.5		17
千金三黄湯	(千金方)	4.0		5	清湿化痰湯	(寿世保元)	1.5		11
敗毒湯	(香川家方)	3.0		8	補肝散	(万病回春)	1.5		21
独活寄生湯	(和剂局方)	3.0		15	大防風湯	(和剂局方)	1.5		15
収涙飲	(橘窓書影)	3.0		12	加味八仙湯	(万病回春)	1.5		16
四順清涼飲	(外科正宗)	2.0		4	洗肝明目湯	(万病回春)	1.0		19
独活葛根湯	(外台秘要)	2.0		9	明目地黄丸	(浅田家方) 丸剂	0.67		8
清湿湯	(全解)	2.0		9	独活湯		2.0	2.0	12
十味敗毒湯	(華岡青洲)	1.5		10	秦艽羌活湯			5.0	11
疥癬浴薬方		溶剂19.0		12					
神应養神丹	(外科正宗)		3.0	8					
当帰拈痛湯	(蘭室秘蔵)		3.0	15	解語湯	(永類鈴方)	3.0		8
辛夷散	(濟生方)		2.5	10	通経導滞湯	(外科正宗)	2.5		13
行気香蘇散	(古今医鑑)		2.5	10					

処方名および分量(1日分量)は主として経験・漢方処分量集によった。

散形花序



640. ウド(ツチタラ) [タラノキ属](うこぎ科)
Aralia cordata Thunb. (独活)

【分布】北海道から九州およびサハリン、朝鮮半島、中国に分布し、山野に生え、畑に栽培される多年草。【形態】草丈1.5m内外。茎は直立し、太い円柱形でまばらに分枝する。葉は互生し、長柄で2回羽状複葉、小葉は卵形できよ歯縁。花期は夏～秋。雌雄異株で茎上部の大形散形花序に淡緑色の小さな花を多数つける。果実は液果様の核果で黒熟する。【薬用部分】根茎(和独活くワドクカツ)、独活、根(和羌活くワキョウカツ)。10月～11月に根を掘りあげ、水洗い後日干しにする。【成分】根茎、根に精油のリモネン、サヒネン、 α -ピネン、ミルセン、テルピネンのほか、ジテルペン酸として1-カウル-16-エン-19-酸、1-ピマラー8(14)、15-ジエン-19-酸、有機酸、糖類、アミノ酸、アルカロイドなどが含まれている。【薬効】発汗、解熱、鎮痛作用があり、風邪、頭痛、めまい、リウマチ、神経痛、関節炎などに用いられる。また茎葉を浴湯料に使用すると肩こり、痔疾などに効果がある。【使用法】頭痛、めまいなどには乾燥根1日量15gに400mlの水を加え、半量になるまで煎じつめ、3回に分けて服用する。食前、食後いずれも可。茎葉を5cmほどに刻み、陰干しにしたものを浴湯料として用いる。【処方例】疎経活血湯(萬病回春：当帰2、防己1.5、地黄2、羌活1.5、川芎2、乾姜2、甘草2、石膏6)。【その他】中国ではウドの根、根茎は独活の一種である九眼独活もしくは当帰として出回っている。

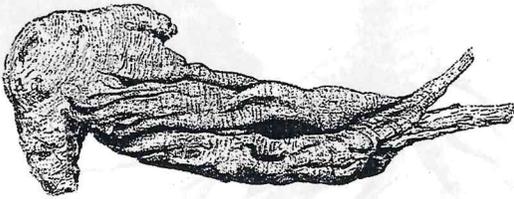
薬用部分：根茎

(牧新1725)

参考文献

1. 日本薬局方外生薬規格集 第12改正 P41~42
5. 生薬ハンドブック ツムラ
6. 現代東洋医学 vol.8.No2 1987.4 P61~78
7. 漢方製剤の知識 薬事日報社 ツムラ vol.32.No9(1996) P63~67
8. 新古方薬囊 荒木 性次 方術信和会
11. 本草備考
13. 意积神農本草経 小曾戸 丈夫 築地書館
14. 和漢薬物学 大塚 恭男 南山堂
15. 漢方のくすりの事典ー生薬・ハーブ・民間薬 鈴木 洋 P86.311.448.446
16. 漢方薬理学 高木 敬次郎 木村 正康 P182~183
17. 中薬学 P218
18. 和漢の選別と薬効 P373~377
19. 漢方診療ハンドブック 桑木 宗秀 創元社
20. 原色牧野和漢薬草大図鑑

薬用部分：根



662. シ シ ウ ド (ウドタラシ)

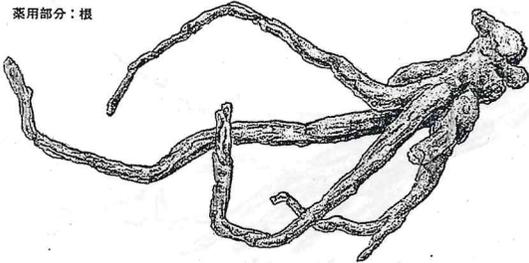
Angelica polyclada Franch. (= *A. pubescens* Maxim.) (猪独活) [シシウド属] (せり科)

【分布】日本特産種で、本州、四国、九州に分布し、山地のやや湿った日当たりの良い場所に生える大形多年草。【形態】草丈は2m内外。茎は大きく直立し、中空の円柱形で上部で分枝する。葉は粗大で3回羽状複葉、小葉は卵形で、葉柄の基部は茎を抱く。花期は8~10月。枝先に大きい複散形花序をつけ、多数の白色の小花を開く。果実は扁平形で楕円形。【薬用部分】根(独活トクカツ)。根は秋~春先にかけて掘りとり、水洗いしてから6cm位の輪切りにして、まず風通しのよい所で陰干しにする。干しあがったら数時間日光にあてた後、仕上げの乾燥をする。市場ではうごぎ科のウド *Aralia cordata* Thunb. の根を同じように扱っている。【成分】精油、クマリン誘導体を含み、アングリコール、アングリコン、ウンベリフェロン、スコボレチン、チグリン酸、アングリカ酸、パルミチン酸などを含む。【薬効と薬理】精油には皮膚を刺激し血行を促進、発汗、下熱の作用がある。民間では浴湯料としてリウマチ、神経痛、冷え症に効果があり、また発汗、解熱、鎮痛に服用する。【使用法】浴湯用には乾燥した根300gを木綿の袋につめて、水のうちから風呂に入れて沸かし、入浴する。服用にはよく乾燥した根(独活)20gを1日量として煎じ3回に分けて服用する。【その他】現在、中国産の独活には数種があり、せり科の *Angelica* 属植物を基原とし、その産地により川独活および香独活に分けている。その他、牛尾独活はせり科の *Heraclium* 属植物を基原とし、九眼独活はウドの根を用いる。



(牧新1773)

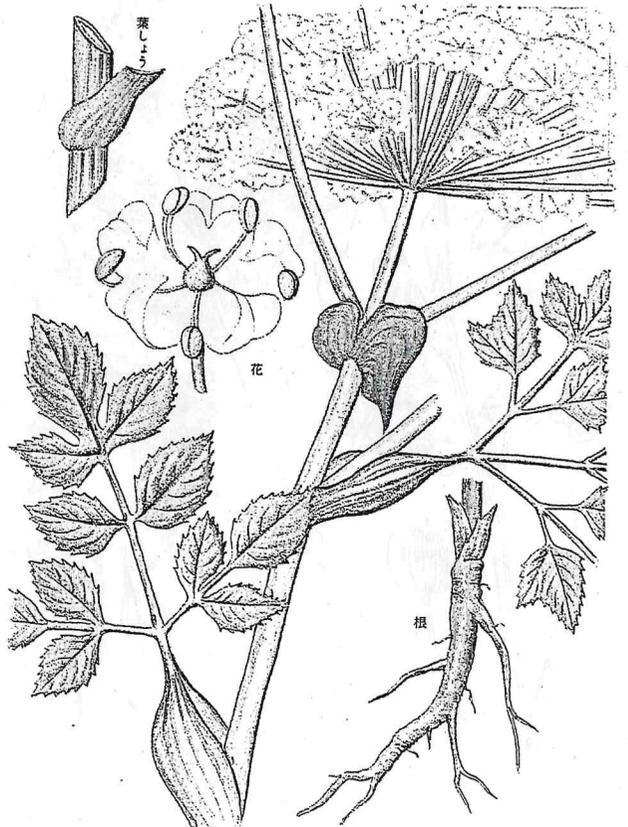
薬用部分：根

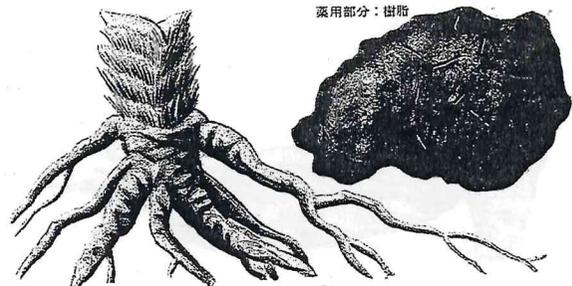
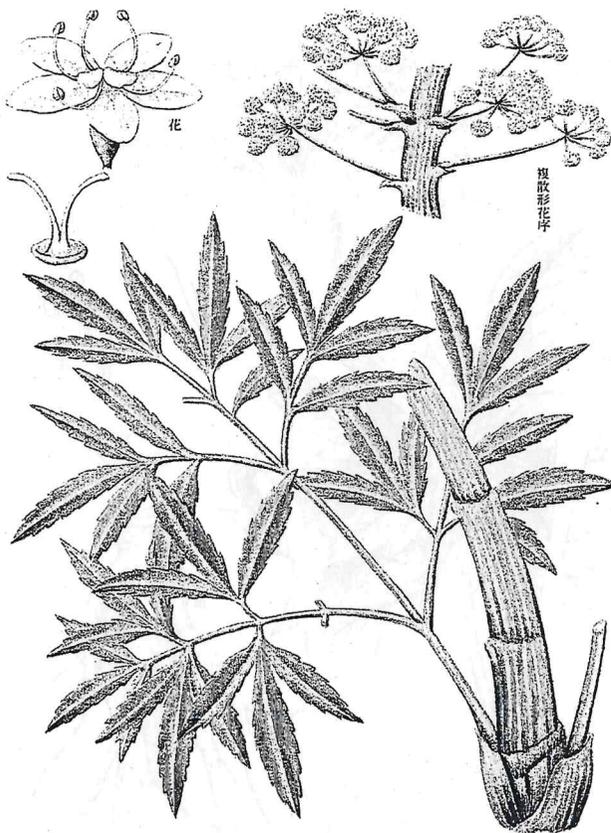


663. ミヤマシシウド [シシウド属] (せり科)

Angelica matsumurae Yabe (深山猪独活)

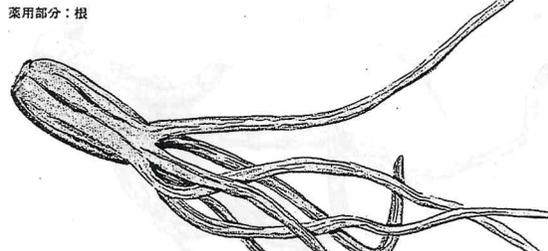
【分布】本州に分布し、深山に生える大形の多年草。【形態】草丈1~2m。茎は直立し、中空の円柱形で上部で分枝する。葉は大形で3回羽状複葉。小葉は広皮針形か卵状長楕円形。下面は粉白色。葉柄の基部は茎を抱く。花期は8月。枝先に大きい複散形花序をつけ、多数の白色の小さな花を開く。果実は扁平で長楕円形。【薬用部分】根(独活トクカツ)。秋~冬にかけて根を掘り起こし、水洗して日干しにする。【成分】根にクマリン誘導体のアングリカル、グラブフラクトン(アングリコン)、ウンベリフェロン、オストールなどのほか、アングリカ酸、精油などを含む。【薬効】精油には皮膚を刺激して血行を促進し、発汗、解熱などの作用がある。独活は発汗、解熱、鎮痛などの効果があるとしてリウマチ、関節痛、むくみなどに応用される。民間では浴湯料として神経痛、リウマチ、冷え症など用いられる。【使用法】独活1日量20gを水で煎じ、3回に分けて服用する。浴湯料には根300gを布の袋に入れ、浴槽に投入する。【その他】ミヤマシシウドはシシウド *A. polyclada* Franch. と形態がよく似ており、同一種とする見解もある。中国産の独活には数種あり、主としてシシウド属植物の根で、他にハナウド属のものも用いられる。日本産の独活(和独活)はほとんどがうごぎ科のウド *Aralia cordata* Thunb. を基原とするものである。





680. ア ギ [オオウイキョウ属]
Ferula assa-foetida L. (せり科)
(中)阿魏

【分布】ソ連中央アジア、イラン、アフガニスタンの乾燥地帯原野に分布する多年草。【形態】草丈約2.5m。茎は直立して多液質、縦条があり、なめらかで緑色をしている。葉は羽状複葉で、黄色い花を複散形花序につける。円すい形の直根から枝根を出す。【薬用部分】樹脂(阿魏<アギ>)。茎、根茎を切断して切り口を木の葉でおおっておくと、根皮から乳液が浸出して固まり、約10日ごとに、上部を薄く削り取る。2~3か月間採集できる。【成分】樹脂が主成分でフェルラ酸とそのエステル類、ファルネシフェロールA, B, Cなどを含み、他に精油としてピネン、ワニリンおよび特異臭のsec-アチルプロピルジルスルフィドなどを含む。【薬効と薬理】強臭性があるため、かつては嗅覚神経を刺激する神経安定剤、刺激性去痰剤に使用された。健胃、消化駆虫薬として用いられるほか、中近東ではカレーなどの香味、ヨーロッパでは香料に使用する。【使用法】内服剤とするほか、煎じたり、臭剤として使用。【その他】中国の新疆産産ものは新疆阿魏*F. caspica* Marsh.-Bieb.で、阿魏として同属の植物からも同様に採集して使用される。阿魏はその種類や新旧によって成分に差異があり、品質がまちまちである。臭気は強いが、嗅み止めの効果もあり、元時代に調味料として根に羊肉をつけ込むなど、阿魏と同じ使い方をしていたようである。



683. ハ ナ ウ ド(ソウジョウジヤクシ)
[ハナウド属](せり科)
Heracleum lanatum Michx. subsp. *moellendorffii* (Hance) Hara(=*H. moellendorffii* Hance)
(花独活)

【分布】本州関東以西、四国、九州および朝鮮半島、中国に分布し、山野に生える多年草。【形態】草丈70~100cm。茎は中空の円柱状で直立し、葉は互生し、大形で3出羽状複葉、小葉はさらに分裂し1~3対ある。花期は5~6月。大形の複散形花序に多数の白色の花をつける。果実は平たく倒卵形。【薬用部分】根(牛尾独活<ギョウビドクカツ>)。春の初めまたは秋の終りに根を掘りとり、土泥を払い落とし、茎、葉およびひげ根を除去し、さらして乾すか、あるいは弱い火であぶり乾かす。【成分】根にクマリン誘導体が含まれ、イソピネネリン、ピネネリンおよびベルガブテンなどからなる。【薬効】リウマチ、頭痛、足や腰の痛み、めまい、歯痛などに用いる。【使用法】内服には2~10gを煎じて服用する。酒に浸すか、丸剤、散剤として用いる。外用には煎液で洗う。【その他】中国ではハナウドを牛尾独活あるいは漢白芷と呼び、その根を独活または白芷の類縁生薬として一部の地域で薬用しているが、市場性はないという。日本で生産する独活はウド *Aralia cordata* Thunb. の根で、中国では土当帰と称している。和名ハナウドはウドに似た茎葉にそれよりも大きい白花を美しくつけるからである。別名は江戸の芝にある増上寺境内に生えていたことから。



690. ノトブテリギウム・インキスム

〔ノトブテリギウム属〕(せり科)

Notopterygium incisum Ting ex H. T. Chang

(中) 羌活

【分布】中国の陝西、甘肅、四川、雲南省に分布し、標高2000~4200mの林縁、林内、草地に生える多年草。【形態】草丈60~150cm。根茎は粗大で円柱形が不規則な塊状。茎は直立し、中空で淡紫色で細い縦条紋がある。葉は長柄で3出3回羽状複葉で小葉は3~4対、卵状皮針形から長円状卵形でさらに浅く深裂する。長さ2~5cm。花期は7~9月。茎の頂や葉えき白色花を複散形花序につける。【薬用部分】根茎および根(羌活<キョウカク>)。春、秋に根と根茎を掘りあげ、水洗い後ひげ根を除いて日干しにするか弱火で乾燥する。【成分】根、根茎に精油の α -、 β -ピネン、リモネン、ボルニルアセテートを含む。【薬効と薬理】薬理作用およびその効果についての詳細は不明だが、民間的に去風、鎮痛などの作用が知られており、鎮痛、鎮痙、新陳代謝賦活薬として頭痛、関節痛、リウマチ、身体不随、身体疼痛に用いられる。【使用法】鎮痛、鎮痙、新陳代謝賦活に、羌活1日量3~9gを煎じて服用する。また各種の漢方処方に配剤される。【処方例】川芎茶調散(和劑局方)；白芷、甘草、羌活、細茶、荆芥、川芎、防風、香附子、薄荷葉、九味羌活湯(張潔古方)；羌活、防風、白芷、生地黄、蒼朮、黃芩、細辛、生甘草、川芎、生姜、葱白【その他】生薬の羌活としてはほかに寬葉羌活*N. forbesii* Boiss. も用いられる。

